



海人(うみんちゅう)と山人(やまんちゅう)



東洋大学社会学部社会心理学科教授

戸梶亜紀彦 (とかじ あきひこ)

同志社大学文学部文化学科心理学専攻卒業。同志社大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程後期満期退学。広島県立大学経営学部専任講師、広島大学大学院社会科学研究所助教授、教授を経て現職。

「心理学ライフ」という心理学者の趣味を取り上げる新しいコーナーができるということで、編集委員の先生のお一人からいきなり原稿の依頼がきました。それは周囲に尋ねた結果なのだそうですが、どなたの推薦かはわからぬまま、あまりにも身に覚えがありすぎるため、執筆をお引き受けすることにしました。

私の特徴的な活動は、春から秋にかけては海人になり、冬は雪山で山人に変身することです。『感動』に関する研究や観光による地域活性化などに関心があるため、観光地にはよく訪れますが、沖縄の離島および信州の冬山での過ごし方は幾分ですが破天荒です。

春から秋にかけての数日は、沖縄の離島で過ごします。そこでは、珊瑚礁の海の中を素潜りで漁をします(よく訪れるその島は漁業専従の方がいないため、密漁にはなりません。また、海の生態系のことを一応考え、サイズや数量もちゃんと考慮しています)。捕ってきた獲物は、その日の晩に他の宿泊客らと島酒(泡盛)を飲みつつ美味しくいただきます。そうした環境で「ゆんたく」(語らい)を楽しみながら、日本の各地から集まった異なる背景をもった方々の旅の動機や感じた事柄などを伺います。そこでは、会社の休みを世間とずらして取って来る人、仕事を辞めて自分探しに来ている人、離島が好きで島を渡り歩いている人、何もせずに昼寝や酒を飲んで

過ごしている人、溜まったストレスのリフレッシュをしに来ている人など、さまざまな旅行者と話をすることができます。民宿では、見知らぬ人たちと相部屋で泊まることになるので、すぐに話のできる関係をつくることができます。

日常ではなかなか接する機会のないような方々の話を聴くことは、いろいろな業界の普段では知ることのできない世界に接することができます。視野を広げるのに有用です。また、こうした環境にしばしの間だけでも身を置くと、新たな活力が湧いてきます。特別にこれと言った観光資源のない島での日々は、美しい自然を眺めつつ、海の恩恵にあずかり、酒を酌み交わしながらいろいろな人たちと語らうという貴重な時間を与えてくれます。

一方、冬の信州では、スキー場のある雪山に籠もります。そこには学生時代からお世話になっている旅館があり、他大学のスキー部の学生らと共に無償で住み込みをします。朝は6時頃に起床し、小一時間ほど雪掻きをします。時には、氷点下15度を下まわる寒さの中で行うこともあります。その後、宿泊客の朝食の準備や後片づけをし、布団の上げ下ろしに部屋掃除、ゴミ処理場へのゴミ捨て、農協への買い物などを済ませます。これらが一通り終わった後に、5時間ほどの自由時間が与えられ、ゲレンデに直行し、体育会的な気合いの入ったスキーをしま

す。ただ、ここでもスキーだけをして楽しむというのではなく、ゲレンデでの客層の変化や混み具合、食堂の利用者の特徴やそのおばちゃんからのシーズンを通しての情報収集、土産物店の店主への聞き取りなどを行っています。もちろん、宿の奥さんや旦那さんたちからも、宿の利用者についての特徴の変化や集落全体に関する情報などについても教えていただきます。

肉体労働とスキーという日々を過ごすと、日頃使っていなかった体中の筋肉が騒ぎだし、いかに怠惰な日常を送っていたのかと反省させられます。おそらく、信州での肉体労働生活は、1年を通して最も健康的な生活になっているのではないかと思います。

旅館で住み込みをすることは、通常ではお客の視点でしか見ることのない観光地を働いて迎える側の視点から見ることができ、新たな視点を提供してくれます。また、普段はなかなか聴くことのできない地元住民の本音の部分についても知ることができます。

世間のブームに乗って観光客数が年々増加傾向にある沖縄と、バブル以前と比較して今や明らかに斜陽産業となってきたスキー場のある信州という二つの地域で、通常とは全く違った角度からその地域に接することができるのは、研究とプライベートおよび心身の健康というすべての方面において非常に有意義なものとなっています。